
最後には愛が勝つ？

蒼井 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後には愛が勝つ？

【Nコード】

N1304E

【作者名】

蒼井 涼

【あらすじ】

愛する人との結婚を目前にして、天国に拉致された男の悪戦苦闘物語です。

第1話

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。

ああ、夢見てるんやな。

あるある。妙にリアルな感じ。

「マー、マー、何で、何で・・・」

ああ、これは由美の声やね。何か怒ってないか？

まあ、夢ではよく怒られるよな。

「ほんまやで、大うそつきや！こら、まっちゃん！

ひどすぎるわ！」

ん？これは百合子さんか？

めずらしいなあ、百合子さんまで怒ってるぞ。

へへ、夢で浮気でもしたか、俺。

いやいや、夢でも半殺しはごめんやね。

「何で、先に死んじゃうんよ、私を見送るって約束したやん、

結婚するって約束したやん・・・」

由美が泣いてる？先に死ぬ？俺が？

また縁起でもない夢やな。こら、さつさと目覚めた方がええね。

で、目が覚めた。はずだった・・・

いや、確かに目が覚めたのだ。

しかし、そこに見えた光景はとんでもないものだった。

由美や由美の親友、百合子さんやらが俺を見下ろしてる。

その上、ついさっきまで夢の中で聞いてたことを泣きながら叫んでる。

えええ？まだ、目が覚めてないのか？

と、思った瞬間、体がふわっと浮いた。

すると、さらにとんでもない光景となった。

なんと、そこは俺の葬式会場だったのだ。

俺が棺おけに横たわり、皆が最後のお別れというわけで俺を覗き込んでいる。

ぐるっと見回すと俺の遺影が花に包まれ、にやついている。

待て待て、俺、死んだのか？

いつ？何で？

こんなこと考えてる俺はなんなの？

幽体離脱？いやちがうな。魂？

なんで？なんで？

「ま、最初は誰でもそうです」

棺おけを取り囲む人の方向からではなく、真後ろから声が聞こえた。振り向くと、スーツを着たセールスマン風の初老の男性が立っていた。

いや、宙に浮いていた。

「だ、誰ですか。あなたは」

「お迎え担当です」

お迎え？またわかりやすい。

「て、天国ですか？地獄ですか？」

つまらんことを尋ねる自分が情けない。

「行けば分かります。下界では一般的に天国と呼ばれてはいますがね。」

「何か微妙ですね」

「微妙ね・・・下界では相変わらず言葉が乱れてますねえ。なぜかわしい。」

いい大人が使う表現ではありませんよ。直したほうがいい。」

「す、すいません」

なんで誤まつてるんだ。

「それより、俺は死んだのですか。」

おそろおそろ尋ねた。

「そうですよ」

無碍もない。

「いつですか？なんで？」

「覚えてないんですね。あなたは、建設中の建物から転落したんです。

即死でした。楽だったはずですよ。」

「転落？いつですか？」

「3日前です。あなたは、由美さんと会う約束をしていた。

いよいよ、結婚を間近に控え、新居に会う家具などを見に行く予定だったのです。

ところが、急に入った連絡で新築ホテルの現場に寄ったあなたは事故に

合ったというわけです。」

「由美は・・・」

「ずっとあなたから連絡がないため、不安になった由美さんはあなたの会社に電話したんです。

それは気の毒でみていられませんでしたよ。」

そりゃそうだろう・・・なんてことだ・・・

「俺は、これから・・・」

「そうです。私のご案内します。」

下では由美が泣いている。百合子さんが怒りながら泣いている。

こうして俺は天国に導かれ、星となって由美を見守ることとなった・

とは程遠い、とんでもない死後を送ることになったのだ。

第2話

ここで、話を整理しておこう。

俺は愛する女性に「まー」というなんとも間の抜けた呼び名で呼ばれている、いや、いた男だ。

名前は丸山雅夫で、やたら「ま」が多いのでそうなった。で、年齢は50歳。

なんや、おっさんやないか、と読むのをやめる読者がいるかも知れないが、

少し待つてほしい。

彼女、つまり由美だが、出会いは36年前に遡る。

中学1年、電車やバスは大人料金だが、まだまだ子供の頃だ。

俺が最初に彼女を意識したのは、彼女の声だった。

「皆さん、今日はサイモン&ガーファングルのレコードをかけます

」

そう、彼女の声は昼休みに放送室から流れてきた。

皆、弁当を食べるのと、じゃべるのに忙しくろくに聴いてはいなかった。

でも、俺にはなんとも心地よい声だった。

どんな子なんやろ・・・

「あれ、しゃべってんの誰や？」

「え、2組の上田やろ。あいつバレー部やのに出たがりやで」

そういう悪意に満ちた中傷は聞き流し、「上田」という名前だけに覚えてた。

ただ、それだけだったのだが、ある日のこと、

「丸山くん」と呼びかけられたのだ。あの声で。

振り向くと彼女がいたのだ。顔を見たのは初めてだったのだが素敵な笑顔だった。

「な、なに？なんで俺のこと知ってんの？」

「知ってるよ。バスケ部やる？」

「ああ」そう、俺は背が高い方だったこともあり、バスケ部にいた。

「私、バレエ部やから、いつも体育館のロッカーで着替えしてるから時々見てたもん」

「そうなんや。」納得。

で、何で声かけてくれたんやろ？」

「でさ、クラシック好きなんやろ？」

「え？何で知ってんの？」中学１年でクラシック好きなんて、あんまり人に言えない。

「うん、鈴木先生に聞いたんよ。でさ、モーツァルトのレコード、今度流すから

貸してくれへんかな」

そついうことか。

「ああ、ええよ。なんでもええんかな？」

「40番の交響曲？きれいなんやろ？」

「ああ、そやね。明日持ってきたらええんかな」

「うん。お願い。昼休みに放送室に持ってきてくれる？」

「わかった」

それが出会いだった。

次の日、放送室にレコードをいそいそと持って行った。

それから、時々昼休みに話すようになり、距離が近づいていった。

クラスが違うので、その頃はやっていた交換日記をはじめた。

携帯もない時代やからね。

しかし、そんな可愛い交際は長続きしなかった。

ま、俺が子供すぎたのだ。

高校は別々になり、そのまま会うこともなく別々の人生を歩いてきた。

お互いに結婚も経験したが、うまくいかず、一人となっていた。そこでよくある話と一緒にされると心外なのだが、48歳の時に中

学の同窓会で
再会したのだ。

俺は長く関西を離れていて、一人になって戻ってきて半年ほど経った頃だった。

彼女はずっと神戸にいたようだ。

彼女に会った瞬間、30年以上の隔たりが一瞬にして消えたような気がしていた。

もちろん、俺の一方的な感情だった。

それでも、幸せな気分になれた。

その日から、彼女が心から離れなくなっていた。

とはいっても、いかんともしがたく、勝手に片思いを楽しんでいたところが、気まぐれでいたずらな神様がいたもんだ。

同窓会から1ヶ月近くたってから、突然彼女から電話があったのだ。

それからお互いの状況がわかり、よく会うようになり、昔果たせなかった

告白をし、結婚を約束するまでに近づけていたのだ。
ところが・・・

俺は死んでしまったのだ。

来年にはようやく結婚できるという時にだ。

こんな、ひどい話ないよなあ。

何で、再会させたんだよ。何で、恋に落としたんだよ。

何で、告白させたんだよ。気まぐれにもほどがあるぞ、神様。

「神様、なんて、様なんてつけるからですよ」

突然、黒服の男が口を開いた。

俺の考えてることわかんのか。さすがやな。

「じゃなに、普通の人なの？」

「そうですよ。上の世界も地上と変わりませんよ。」

社長と社員みたいなもんです。」

「そうなんや。なら、下界のことを邪魔すんなって。」

「仕事ですから」

「で、俺は行くしかないのか・・・？」

「そうですねえ。残念ですが」

見下ろすと、由美が泣いている。

悔しいやら切ないやら申し訳ないやら、胸が張り裂けるようだ。

しかし、黒服の男に引っ張られ、葬儀会場の前に停まっていた黒いタクシーに乗った。

そこからはよく覚えていない。

気がつくと、東京都庁を思わせるようなビルの前に車は着いていた。

第3話

「でかいな」

俺は思わずつぶやいた。

「こっちは人口が増えるばかりですから」

黒服がすかさず答える。

「そうか・・・こっちでは人が亡くなって人口が減ることがないもんな」

「いや、そういうわけでもないんです。」

「?じゃ、こっちでも寿命があるのか?」

「いや、そういうわけでもないんです。」

そのまま続きがあるのかと、待っていたがそれ以上何も言ってくれないので

文句を言おうとしたら、ロビーの受付みたいな所に来てしまっていた。

そこには、受付嬢がおり、

「ようこそ」などと言う。

まるつきり下界と同じだ。

「こちらに名前を書いて下さい。」

差し出されたペンを受け取り、分厚いノートに名前を書く。
妙な感じだ。

知った名前がないか、ページをめくってみようかと思ったが
すぐに閉じられてしまった。

「ここでは、個人情報保護が下界よりも厳しく徹底されております」
黒服が表情を変えずに言った。

「へえ。そうなんや。」

それより、次の展開だ。

「これから俺はどうなるんですか?」

おずおずと尋ねるとにべもない。

「来ればわかります。」

「おたくね、もう少し死人に優しくできないかな」

「いちいち優しくしてたら仕事が滞りますので。」

ビジネスライクにさせて頂いています。」

「はあ。そうですか。」

とか何とか言ってるうちに、受付を離れて4階に上がる。
もちろんエレベーターだ。

「やっぱり、4階なんや。」

「何がです?」

黒服の表情に少し変化があった。

「いや、死人が行くんで、4階」

黒服が鼻で笑った。

「やっぱり、あなたも同じこと言いますね」

少し悔しい。で、気を取り直してもう一度尋ねた。

「これからなにがあるんですか?」

今度は答えてくれた。

「面接です」

「誰と?」

「移民局です。」

「俺は移民なんですか」

「そういうことです。」

これからあなたが、どこに住み、どんな仕事をし、その結果どう
生まれ変わるのかを

説明されるのです。」

生まれ変わる?

「生まれ変わるんですか?ほんまにあるんや」

少し黒服の口の端があがった。

「あるんですよ。うれしいですか?」

「いや、うれしいというか微妙な感じですけどね。」

でも、とりあえずまた戻れるんですね。」

黒服の口の端がさらにあがった。

「戻れますよ。さあ、着きました。」

このまままっすぐに廊下を行きますと、ドアが二つあります。

あなたは、その右側のドアを開いて中にお入り下さい。

面接官がいますので。では。」

黒服はそのままエレベーターからもおらずに、そのまま1階に下りて行ってしまった。

仕方ないので、言われた通り、廊下を歩いて右側のドアを開いた。

真っ白な壁と床のこじんまりとした部屋だった。

そこには向かい合わせで座るように机と椅子があり、向こう側に面接官が座っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1304e/>

最後には愛が勝つ？

2011年1月2日02時41分発行